

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

# 届け人

松任高等学校三年

宮本 みやもと

葵 あおい

アナタの声、お届けします。

過去、現在、未来。

天国、地獄。空想、現実。

場所や時間は問いません。

勿論お代もいりません。

アナタの望むまま、どこへなりとお届けいたします。

高校生活最後の夏休み、私の住んでいる学生寮に一通の手紙が届いた。封筒には住所も郵便番号も書かれていない。ただ一言、親愛なるアナタへとだけ書かれた、差出人不明の手紙。内心気持ち悪いなどは思ったけれど、この情報社会にわざわざ手紙でというのも変な話だ。もしかするといたずらである可能性もあり得る（限りなく低い可能性ではあるが）。そうしていろいろと考えているうちに、だんだん面倒になってきたため、思い切つて封を切つてみれば、この見るからに怪しい文章が並んでいた。

「こんなの誰が引つかかるもんか。」

誰もいない部屋で一人文句を言いつつ、そのまま手紙をびりびりに破つて、叩きつけるようにゴミ箱へと捨ててしまった。

「あーあ。勿体ないなあ。」

不意に人の声がして、慌てて後ろを振り返った。しかし、そこには誰も居らず、衣服や雑誌などが散乱しているだけだった。

「あ、ここここ。そのまま上見てくれる？」

また同じ声をした。若干恐怖を覚えつつも、私はゆつくりと上を見上げた。

「うわっ!! 人!?!」

なんと天井から逆さまに人がぶら下がっていた。それも何故か、ワイシャツに黒いベストに黒いショートパンツ。おまけに赤い髪と、まるでアニメのキャラクターのような格好をしている。

「どうも初めまして。今回君のパートナーになった、ヨナガと言いま

す。短い間ではございますが、よろしくお願ひします。」

天井にぶら下がったままの状態で、ぺこりと頭を下げるヨナガさん。逆さまになっているというのに、辛くはないのだろうか。

「君、名前は？」

「えっ? あかり、ですけど……」

「じゃあ早速だけど、届けたい相手の名前と、届けたい場所を教えてくださいませんか?」

よつと、という声と共に天井から下りて来たかと思えば、ヨナガさんはいきなりよくわからないことを言い出した。届ける? 何を? その前に、どうしてこの人は私の部屋にいたのだろう。考えれば考えるほど、次から次へと疑問が出てきて、私の頭はパンク寸前になっていた。

「あの、ちよつといいですか?」

「ん? 何? 質問?」

「質問というか、そもそも、どうして私の部屋にいたんですか?」

「ああ、届いたでしょ? 手紙。手紙を読んだ人の声を相手に届ける。それが僕の仕事だから。」

表情一つ変えず、さらりと言われてしまった。

手紙というと、さつき破り捨てた手紙だろうか。つまり、その手紙を開けてしまったために、よからぬことに巻き込まれてしまったと?

「本当は手紙を捨てちゃいけないんだけど、今回は特別サービス。騙されたと思って、言ってみてよ。」

相変わらずマイペースに話を進めていくヨナガさん。ここまでくると、まともに話は通じないと思ったほうがいいのかもれない。もういつそ乗ってみるしかないのだろうか。

「じゃあ、かやつて友達に……」

かや。高校一年生の時に転校してしまった親友の名前だった。当時急に転校すると言われ、戸惑ってしまった私は、結局お別れの挨拶ができないまま、かやと離れてしまった。以来なんだか気まずくて、連絡もとつ

ていない。

「かやさんだね。じゃあ、すぐにでも届けられるかな」

「でも、かやは県外にいて……」

「それなら大丈夫。こつちに戻ってきてみるみたいだよ？」

どうしてそんなことがわかるのか疑問だったが、いちいち突っ込むのも今更なため、あえて何も言わないことにした。

「かやの居場所、わかるんですよね？ だったら、私をそこへ連れて行ってください。」

近くに来てくれるのなら、誰かを通してではなく自分で伝えたい。そんな思いから、私はヨナガさんに詰め寄った。けれど……

「ごめん、それは無理。」

は？と思わず声が出た。私の声を届けてくれると言ったのはヨナガさんのほうだ。かやがこちらに戻ってきていることも知っていた。そこまですわかっていて、何故つれていけないのか……やはりあの手紙はいたずらだったのだろうか。

「ごめん、相手が半径一キロ以内にいるときは、具体的な居場所を教えちゃいけないんだ。」

そう言いながら、ヨナガさんは深々と頭を下げた。ここまで真剣に謝られてしまうと、逆にこちらが申し訳なくなってしまう。

けれど、ヨナガさんの言っていることが本当なら、かやはすぐ近くにいるということ。それなら、少し捜せば見つかるかもしれない。まだ半信半疑ではあるけれど、寮の周辺くらいは捜してみようか。そう思って部屋を出ようとした時だった。

「わざわざ捜しに行かなくても、むこうから会いに来てくれるかもよ？」

どこか慌てたような様子で、ヨナガさんは私の前に立った。まるで部屋から出るなと言うように。

「この手紙の期限は、日が暮れるまでなんだ。だから、下手に部屋を

出て行って入れ違いになっちゃったら大変だよ？」

「でも、ここで待ってて会えなかったら、それこそ本末転倒じゃないですか。」

「それはそうなんだけど……」

引きつった笑顔をうかべ、目を泳がせながらも、ヨナガさんはそこを退こうとしない。さっきまでのへらへらした様子とはまるで違っていた。一体どうしたのだろうか。

「もう、限界。そのかやさん、今この場にいるんだよ。」

「……は？」

一瞬意味がわからなかった。かやはこの場にいる。ヨナガさんは確かにそう言った。けれど、この部屋の中にいるのは、私とヨナガさんの二人だけ。

「わからない？ 鈍いなあ、あかりんは。」

さっきとは打って変わって、おどけたような口調で言うヨナガさん。『あかりん』友達の中でも、私のことをそう呼ぶのは、ただ一人だけ。

「まさか、かや？」

「ピンポーン。大正解。」

そう言って、ヨナガさん改め、かやはニツと歯を見せて笑った。

半ば半信半疑ではあったが、あかりんというあだ名は、他の友達はおろか、家族でさえ呼ばない。容姿や性格は勿論、性別まで違うとは言え、そのあだ名で呼ぶということは、やはりかや本人なのだろう。

「やっぱりびっくりしたよね？ 僕、ものすごく変わっちゃったし。」

ぼかんと口を開けてしまっている私の様子を見て、かやは苦笑いをうかべた。

「えっとね、順番に説明すると、転校したあの日に僕、交通事故で死んじゃったんだ。その後で、この『届け人』っていう、成仏できなかった人がする仕事をしたんだ。」

あまりにも非現実的すぎる話に、私は話の意味を理解できずにいた。

ただ一つ理解できたのは、かやは既に死んでしまっているということ。

「なんでそんな大事なことを、最初に言ってくれなかったの。」

「正体を知られたら、見えなくなっちゃうんだよ。だからこの仕事に就くときに、性格も見た目も変わっちゃうんだ。」

困ったように頭を掻きながらも、決して笑顔は崩さないかや。その笑顔が、無性に腹立たしかった。親友の死。そんな残酷なことを告げておきながら、何故そうもへらへらと笑っていられるのか。

「それであかりん。僕に伝えたいことって何だったの？」

「もういいよ。全部忘れちゃった。」

マイペースに話を変えてしまったかやに、怒るところか呆れ果ててしまい、私はかやに背中を向けた。そんな私の様子を見てか、急に真剣な声で、かやは話しだした。

「じゃあ、僕から先に言うね。僕が既に死んでること知って、あかりんショックだったんだよね。それに対して、僕はへらへら笑ってて…だから怒ってるんでしょ？」

かやの言葉に、私は何も答えなかった。別に怒っているわけではない。突然のことに、私もどうしていいのかわからない。それに対してかやは、へらへら笑っていて、死んだこととは別の意味でショックだった。

「誤解しちゃったならごめんね。僕だって寂しくないわけじゃないんだよ？でも、僕まで暗くなっちゃったら、あかりんもつと辛くなっちゃうでしょ？僕、あかりんには笑っていてほしいと思ってるからさ……」

その言葉を聞いて、私はかやのほうを振り向いた。けれど、既にそこにかやはいなかった。部屋中を見回してみたけれど、どこにもかやの姿はない。その代わりに、さっきと同じ封筒が落ちていた。

恐る恐る手紙を拾い上げ、中を確認してみるも、中には真っ白な紙が入っているだけだった。

「また、お別れ言えなかった……」

誰もいなくなった部屋で、私は一人泣き崩れた。その瞬間、かやに言

われた言葉を思い出した。

笑っていてほしい。かやはそう言っていた。ここで私が泣いていたら意味がない。私は少し乱暴に涙をぬぐい、ふともう一度封筒に目を落とす。すると、下のほうに小さく書かれた文字に気が付いた。

『死んでもずっと親友だからね』

その一言に、また涙が出そうになるのを必死にこらえ、私は笑顔でそう言った。

「当たり前だよ。」

ぎゅつと抱きしめた手紙には、新しい言葉が書き込まれていた。

『お届け完了いたしました』